

内海 健, 兼本浩祐 編

精神科シンブトマトロジー

症状学入門 心の形をどう捉え, どう理解するか

熊木徹夫

本書は精神科の「症状学入門」である。「症状の把握は, 精神科臨床のアルファでありオメガであるから, 今更あらためて学ぶまでもない。常日頃, DSM も使っているし……」という向きがあるかもしれない。では DSM さえあれば, 診療は滞りなく行えるのか。本書は, 精神病理学の泰斗たる編著者が, これまたベテランの精神科医たちと手を携え作り上げた, 入魂の一作である。なぜあえて今, 本書を世に問うたのか。私なりにその意をくんでみようと思う。

本書を通読し終えて, ふと過去に触れたソシユールの言語理論を想起した。その概略(ほんの一部ではあるが)は以下の通りである。ただ振り返るだけでなく, この理論は精神科症状学においてアナロジーが成り立つことを指摘していく。少し長くなるが, おつきあいいただきたい。

まず, 個別言語共同体で用いられている多種多様な言語体を〈ラング〉, 特定の話し手によって発話される具体的音声の連続を〈パロール〉と呼ぶ。〈ラング〉は潜在的構造であり, 〈パロール〉はそれが顕在化し具現化したものである。この理論は, 言語のみならず, あらゆる体系的分類においても援用できる。精神科症状学においても, しかりである。精神科臨床共同体ですでに承認されている種々の分類体系(既存の症状学)を〈ラング的分類〉, ある特定の精神科医によってその内に構成される独自の症状分類を〈パロール的分類〉と呼んでみたい。前者は「まず体系ありき」で, 鳥瞰的・包括的・硬直的な傾向を有する。対して後者は「まず事象(具体的な症例)ありき」で, 微視的・要素的・弾力的な傾向を持っている。では具体的に精神科医 A の内なる〈パロール的分類〉はいかに構成され・改変されてゆくのか。たとえば, A の眼前に「山田太郎」氏が患者として現れたとする。もちろん, A の内にあら

かじめある症状分類体系を参照枠とするのであるが, 山田太郎氏はそれでは到底収まりきらない特異性を備えていたとする。その場合 A は, いったん独特な「山田太郎病」として内に取り込む。すると, 先にあった A の内なる症状分類体系が揺さぶりをかけられるがゆえに, カテゴリーの組み換えがドラスティックに行われる。こういった試行錯誤こそが, 具体的な〈パロール的分類〉の実践である。乳幼児の言語獲得のプロセスもこれと全く同じで, 眼前にある混沌を言語によって分節化することにより, 同時に自らの内に世界を生ぜしめる。世界の言語化(分類化)と意識化は, 表裏一体である。

本書は, 精神科医個々人がいかに意識的・戦略的に, 自らの内に豊かな〈パロール的分類〉を構成していくのか, またさらに脱構築していくのか指南したものである。その際, 〈パロール的分類〉と〈ラング的分類〉とが曖昧のまま混然一体となる危険がある。実際に個々の〈パロール的分類〉が〈ラング的分類〉に変化を遂げるとき, いかなる条件が働くか。パロール当事者の「私という主体」が捨棄され(これを〈主体抹消〉と呼びたい), 分類の各項目が共同幻想化する。また, 動的なものであっても静的にしか捉えられなくなる(これを〈標本化〉と呼びたい。昆虫の標本を思い描いていただくとよい)。DSM などの操作的診断基準についての最も大きな問題点は, 〈主体抹消〉が確実に行われておらず, たださまざまな〈パロール的分類〉を折衷的に合わせたものにすぎないのに, それがまるで〈ラング的分類〉のように取り扱われることである。それゆえに無批判な姿勢で, DSM を金科玉条のごとく, 臨床の場においても恭しく扱うことについては, 根本的に問題があるのだ。近年, それを意識した議論が, あまりに乏しいように思う。

かつてサリヴァンは「精神科診療において欠かせ

ぬものは参与観察である」と言った。精神科的なかわりは、間主観的であることが大前提で、涼しい顔で客観に徹することはできない。すなわち、精神科医の生々しい身体感覚(官能)を介して、患者とのあわいにあるものをつかみ出したり、すくい取ったりする必要がある。

本書の総論では、精神科医がどのような立ち位置で、どのような自意識をもって、臨床に向き合うべきか、それをかんで含めるように説いている。また各論では、診療の場において多くの医師が立ち往生する要諦について、単なる諸論文のレビューにとどまらない、現場の精神科医の体験・実感から引き出

された生の声が表現されている。すなわちこれは、とても貴重な臨床覚え書きのアーカイブであり、編著者が自ら精神科医としての存在理由を問うた覚悟の書である。本書を通じ、後学が先達の言葉に対峙し、自らの臨床疑問をおつけていくように読んでいくなら、必ずや多くの貴重な臨床経験が再体験されるであろう。

(あいち熊木クリニック院長)

●B5 200頁 2021年 定価:5,500円(本体5,000円+税10%) 医学書院刊